

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520391

研究課題名(和文)モンゴル時代を中心とする東西資料の外来語分析 中国歴代正史の精確な理解にむけて

研究課題名(英文)Collecting and analyzing of "imported words" in various historical sources of the Orient and the Occident

研究代表者

宮 紀子(MIYA, Noriko)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60335239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：モンゴル時代の文献に於いて、アラビア文字やローマ字で音訳されたテュルク語・モンゴル語・中国語、漢字音訳されたテュルク語・モンゴル語・ペルシア語は皆、政治・軍事・文化の東西交流を実証する重要な語彙・概念である。徹底した重商主義を採用し、史上最大の版図を得た大元大蒙古国の皇帝クビライは、何につけ全世界で通用する新たな統一基準を定め、現地の旧来基準との換算表も作成せねばならなかった。度量衡の統一のため官製の機器を頒布、金と銀の両替率を1：10に固定し、税制の整備、出納簿の記入法や各種文書の定型化、多言語辞書の編纂も進めた。これらの事業は、フレグ・ウルスの歴代カンとの友好関係によって支えられていた。

研究成果の概要(英文)：In the documents of the Mongol Period, there are special words of Turkish, Mongolian and Chinese transliterated with Arabic and Roman characters, on the other hand, there are technical terms of Turkish, Mongolian and Persian transliterated with Chinese characters. All of them are important vocabularies and concepts which substantiate the East and West exchange of politics, military affairs and culture. Qubilai, emperor of Dai on yeke Mongqol ulus adopted mercantilism and got the greatest territory in history. He had to fix new general standards which go anywhere in world, and he also had to supply tables for comparison with conventional. To standardize weights and measures, he distributed government-manufactured instruments and fixed the rate of exchange between gold and silver. He also completed taxation system, fixed the form of the administrative documents, and compiled polyglot dictionaries. These projects were supported by cordial relationship with successive monarchs of Hulegu ulus.

研究分野：中国文学、東洋史

キーワード：モンゴル時代 大元ウルス フレグ・ウルス 東西交流 為替 金銀比価 多言語 ユーラシア

1. 研究開始当初の背景

13世紀初頭、チンギス・カンの登場によって幕をあげたモンゴル時代の中国は、伝統文化・価値観が徹底的に破壊された時代として語られてきた。ために、中国、台湾、韓国、日本の各地にじつは相当量、眠っている同時代の漢籍資料に眼がむけられることはほとんどなかった。文学のみならず歴史研究においても、大元大モンゴル・ウルス治下の朝廷や地方の各機関のじっさいの職務、運営システム・科挙制度など基本的な事柄の把握さえ、きわめて不十分であった。

しかし、この約十数年のあいだに、国外、とくに中国の資料が「求めれば見られる」状況になったうえ、未公開文献の出版が相次ぎ、考古・美術資料、遺蹟の発掘・公開も急速に進んだ。いっぽうで、フレグ・ウルス(通称イル・ハン国)において、モンゴル自らが語り記した『集史』をはじめ、とうじの朝廷の骨格・歴史を解き明かすペルシア語の根本資料の研究も進展した。モンゴル時代の研究環境はきわめて恵まれたものとなった。「破壊者」としてのモンゴル帝国像は見直しを余儀なくされつつある。

そうした趨勢のなかで、研究代表者も『モンゴル時代の出版文化』(名古屋大学出版会2006年)、『モンゴル帝国が生んだ世界図』(日本経済新聞出版社2007年 金騰泳訳『朝鮮が描いた世界地図:モンゴル帝国の遺産と東アジア』笑臥堂2010年)等を上梓し、さまざまな新資料を紹介、同時代の高麗・日本はもとより、のちの明・清・朝鮮・日本への影響も視野にいれながら、多角的に分析した。また、大元時代に編纂され、絶えず増訂されつづけた百科事典『事林広記』は、朝鮮王朝や江戸時代の人々にも大きな影響を与えた書物だが、その原型に近いテキスト(従来知られていなかったモンゴル朝廷初期の官制をはじめとする貴重な根本データが多数含まれる)を2種、発掘しえた。この報告は、中国でも時をおかず翻訳・紹介された。

ただ、こうした作業の過程で、モンゴル時代の真の理解、研究のさらなる発展・深化のためには、ペルシア語文献の利用が必須であること痛感された。そこで当該言語をはじめ諸言語の習得につとめ、漢籍と同様、13-15世紀にペルシア語、アラビア語、チュルク語、モンゴル語等で著されたさまざまな文献・画像資料の収集を国内外において開始した。そしてそれらを相互に比較・照合し、ペルシア語のいくつかの基本書を読み進め、詳細に分析を加えた。その結果、モンゴル時代のユーラシア東西における政治や文化の交流を示すいくつかの具体的な新事実が判明した。

モンケ・カアンが弟でバグダードを制圧したばかりのフレグ大王のもとに常德なる漢人を派遣した真の目的は、世界の東西の薬草の名前の照合・統一にあった。フレグ・ウルス初期の宰相で科学者としても名高いナスィールウッディーン・トゥースィーに中国の歴史と天文学の概要を教えた中国人医師

の名前は傅野。モンゴル初期より諸王の側近として仕えた契丹人(カラ・キタイ、大遼)集団の影響は無視できず、そのごの活動にも留意すべきである。Tankasūq nāmāh『珍奇の書』に収録され、14世紀中国語の音韻資料として知られる中国医学書のペルシア語翻訳の原本は、日本のいくつかの抄物によって、李嗣の『晞范子脈訣集解』十二巻と確定される。江戸時代の和算はモンゴル初期における東西学術交流の成果の上に発展。匈奴をはじめ歴代の鮮卑拓跋国家は、一見、『周礼』に法った中華風の官職名を踏襲していても、モンゴルと同様、すべてケシク集団が基本となっていた、すなわち中国正史の文脈、表面上の記述から安易に「漢化」と片付けるべきでない。大元ウルスの世祖クビライの宰相で世界経済の中心地である大都の管理を任されていたアフマドは、ブラルグチなるケシク集団の長官だった可能性が高く、かれが暗殺された理由は、江南の富の掌握をめぐる皇太子チンキムと激しく対立していたため。などである。

これらは中国文学・中国哲学・中国史、ときにはその根幹に関わる事柄でありながら、漢籍を眺めているだけでは決して知りえなかった事実である。一言語一分野に限定されない研究も必要なこと、明らかだろう。

2. 研究の目的

モンゴル時代の漢文資料に頻見されるチュルク語・モンゴル語・ペルシア語等の音韻語彙、ペルシア語・ヨーロッパ諸言語資料中のチュルク語・モンゴル語・中国語の語彙は、大元ウルス、フレグ・ウルスをはじめとする諸ウルスおよびそれぞれの後継政権、あるいは外交・通商関係をもったマムルークやヨーロッパの諸勢力において、特別な地名・人名・部族名であることはもとより、とうじ共有されていた重要概念、すなわち政治・軍事・経済・文化各方面の実態を知るための鍵であり、東西大交流の証ともいえる。

それらを西はイベリア半島から東は日本まで、徹底的に博搜・収集し、同時代の関連文献(典籍・碑刻・文書・絵図・地図・出土文物等の原典資料)と併せ比較対照、正確に把握することによって、その成果を『元史』の再編纂という個人の最終目標に利用することはもとより、資料の少ない歴代遊牧国家の理解や中国の音韻学、漢文資料をほとんど使用してこなかった欧米中心のいわゆる西南アジア学・イスラム学に一石を投じたい。

また、ペルシア語資料中の中国に関する記述を訳注等の手段によって広く紹介し、中国文学・中国哲学・東洋史での活用に供することを目指す。

3. 研究の方法

モンゴル時代の二大資料群たるペルシア語資料・漢籍には、チュルク・モンゴル語語彙が音韻・意識のかたちで相当量遺されている

る（ときには、イタリア語、ラテン語をはじめとするヨーロッパ諸言語資料、アラビア語、シリア語文献や日本の抄物にも見出される）。それらは、大元ウルス、フレグ・ウルスをはじめとする諸ウルスおよびそれぞれの後継政権、あるいは外交・通商関係をもったマムルークやヨーロッパの諸勢力において、重要な意味をもった地名・人名・部族名であり、とうじ共有されていた重要概念、すなわち政治・軍事・経済・文化各方面のシステムと実態を知るための鍵であり、東西大交流の証にほかならない。

まずは、これらの語彙を、西はイベリア半島から東は日本まで徹底的に博搜・抽出、同時代の関連文献（典籍・碑刻・文書・絵図・地図・出土文物等の原典資料）、あるいは近代にいたるまで世界各国で編纂されつづけた多言語辞書と併せ綿密に比較・対照して解析、精確に把握し、『元史』の再編纂という個人の最終目標への備えとなす。

同時に、中国歴代正史および文集や石刻上の非漢民族の墓碑等に見える外来語・漢語意識と照合していく。文献資料のひじょうに少ない匈奴以来のユーラシアの遊牧国家、フレグ・モンゴルを理解するうえで、最初の且つ必須の作業だからである。その成果は、ソグド語や契丹語、女真語の解読にも役立つ可能性が高い。「外来語」という視点から、正史をはじめとする漢文資料を照射し、それらのもつ癖を捉えたうえで、再度読み直し、裏の文脈を掬い取る。

なお、ペルシア語資料中の中国語音訳語彙の抽出、人名・地名・機関等の比定、さまざまな中国に関する記述の訳注も同時進行し、中国語学・中国文学・中国哲学・東洋史での活用に供することを目指す。国内外のモンゴル時代の資料調査を通じて、フレグ・ウルス、中央アジアのチャガタイ・ウルス、ロシア方面のジョチ・ウルスでははヨーロッパ諸国にどのような漢籍や文物がもたらされていたのか、書物を中心とする「知」の東西交流の実証研究、新たな根本資料の発掘・紹介も継続して進める。

フレグ家、チャガタイ家、ジョチ家は、モンゴル勃興期より大元ウルスの版図内にも投下領とよばれる所領を有していたが、当該地の人々の出入や人脈、出版物、商業にかかわるデータの抽出作業は、各朝廷に仕えるテクノクラート集団の解明に有効な手段となるはずである。以上の調査による成果は、そのつど速やかに公開していく。

4. 研究成果

15年以上にわたる漢籍・抄物の調査を継続するいっぽうで、カラ・ホトを経由する陸路、泉州・広州を経由する海路によって西方へと輸出されていったモンゴル時代の漢籍の道を辿り、「東西交流」を具体的に実証するために、『元史』等に見える夥しい固有名詞・外来語を精確に把握するために、何よりモンゴル時代の真の理解、研究のさらなる展開・

深化のために、ペルシア語・アラビア語・テュルク語・モンゴル語・イタリア語・フランス語・ロシア語等の諸言語の文献・画像資料の収集を国内外に於いて実施した。とくに、ペルシア語・テュルク語古写本、文書については、イスタンブールのスレイマニエ図書館・トプカプ宮殿図書館、パリのフランス国立図書館、ロンドンの大英図書館、ベルリンの国家図書館などに蔵される、可能な限り最古最良の写本を選定したうえで、現地調査に赴き、カラー写真を入手した。そして、それらをこれまで収集してきた漢籍、さらには対象を中国歴代の正史、政書、各種文集や、鮮卑拓跋国家・突厥・匈奴国家など“北狄”にかかわる多言語の碑刻、出土資料・画像資料にまで広げ、すなわち遊牧国家における重要語彙（職掌、称号、人名、地名、部族名）を音訳・意識を問わず採集、整理し、各種言語の音価、称号等の通説も再考、詳細に比較照合し、分析を加えた結果、ユーラシア東西における政治や文化の伝統・交流を示すいくつかの新事実が判明した。

フレグ・ウルスにおける度量衡や金銀比価の統一、鈔の導入、農業奨励といった経済政策は、大元ウルスから遣わされたポロト丞相（『集史』のモンゴルおよび大元ウルス関連の記事の唯一無二のインフォーマント）の助言を聞きながら実行に移された。カラ・ホトから出土した大量の糧食支給に関する文書断片・半印勘合帖子、『元典章』をはじめとする漢文資料に見える“支帖”は、塩引や茶引と同様、ムスリム商人・ウイグル商人たちの *barāt, ḥavālah* 為替手形を前提に成立しており、書式もそれを踏襲する。フレグ・ウルスの歴代カンは、大元ウルスのカアンへの認可のもとに即位し、カアンから下賜された漢字の印璽を用い、カンに仕える有力な丞相たちも漢字の職印・称号をカアンから下賜されていた。各ウルスの行政用語（徴税・戸籍作成等）・特殊概念に関して、明らかにテュルク・モンゴル語を中心に介した各種言語の対照表や翻訳辞書が存在し、書記たちはそれを参照した。したがって、フレグ・ウルスやその後継勢力のカン・王族たちが発令した各種命令文、『集史』の「チングス・カン紀」（『元朝秘史』『聖武親征録』と同じくモンゴル語の『金冊』を基本資料とする）及び「ガザン・カン紀」収録の令旨を翻訳する場合には、原文のモンゴル語を意識して、『元典章』等の直訳体・用語を参考にし、とうじのペルシア語と漢語の行政用語・概念の対応を明確にしてゆく必要がある。モンゴル政権は、当初より多芸多才の人材の発掘・囲い込みに熱心で、technocrat 技術主義者を輩出する集団として儒・道・仏の三教のみならず、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教等の各宗教・教団を優遇し税金を免除したり、教団施設の補修や新築に際して莫大な資金を援助し、古今東西の「知」の融合・革新のために「出会いの場」を設定、書物の編纂・製作を先導していた、などである。

また、東の『大元聖政国朝典章』(通称:『元典章』)にはモンゴル語を口語漢語で逐語訳したいわゆる“直訳体”の文書が多数収録され、西のムハンマド・ブン・ヒンドゥシャー・ナフチヴァーニーの『品官任命における書記規範』(通称:『書記規範』)最終的にジャライル朝のシャイフ・ウヴァイスに献呈されることとなったが、もともとはフレグ・ウルスのカン、アブー・サイドの勅命を受けて編纂された行政文書のマニュアル)も、ウイグル文字モンゴル語文書からのペルシア語訳を多数収録しており、この二書が、モンゴル語を仲介してほぼ完全同時代のペルシア語・漢語辞典となりうることから、以下のような翻訳法を呈示した。すなわち、『集史』をはじめとするモンゴル時代のペルシア語資料を翻訳するさい、訳語の選択において、現存するさまざまな対訳資料を利用し、とうじの翻訳官の方法そのままに、東西の連動を一目瞭然に訳出『元典章』をはじめとする政書、全真教や正一教等の道観、禅宗をはじめとする寺刹に下賜された文書と同じ直訳体を使用する試みである。これは、近年盛んな「モンゴル命令文研究」、「直訳体白話碑研究」に一石を投じるはずで、今後も継続する。

なお、ナスィールウッディーン・トゥースィーの『イル・ハン天文表』とその補訂版たる暦、ラシードウッディーンの『集史』、『農書』、『珍奇の書』、『書簡集』、『ラシード区寄進文書』をはじめ、同時代のペルシア語資料(史書・地理書・百科全書など)にみえる中国人官僚・技術者の特定、中国方面に関わるさまざまな重要な記述の訳注作業も遂行した。それらは相互に補完しあう情報の塊とってよく、今年度から順次公開する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

宮紀子、「『ト筮元龜』とその周辺」、『汲古』63、査読有、2013、pp.19-24.

宮紀子、「江戸時代に出土した博多聖福寺の銀錠について」、『高田時雄教授退職記念東方学研究論集(日英文分冊)』、臨川書店、査読無、2014、pp.241-253.

宮紀子、「ジャライル朝スルタン・アフマドの金宝令旨より」、杉山正明編『続・ユーラシアの東西を眺める』、京都大学大学院文学研究科、査読無、2014、pp.15-52.

宮紀子、「モンゴル王族と漢児の技術主義集団」、小南一郎編『学問のかたち もう一つの中国思想史』、汲古書院、査読無、2014、pp.177-222.

Noriko MIYA, “Knowledge” East and West during the Mongol Period, *Acta Asiatica*, No.110, 2015, in printing.

〔学会発表〕(計1件)

宮紀子、「モンゴル時代の『知』の東西」、第55回国際当方学者会議シンポジウム「学問のかたち—中国思想史の基礎」、東方学会(招待講演) 2012.05.25、学士会館

〔図書〕(計1件)

杉山正明編・岩本佳子・小野浩・中西竜也・宮紀子著、京都大学大学院文学研究科、『続・ユーラシアの東西を眺める』、2014、204p.

〔その他〕(計3件)

Noriko MIYA, “Knowledge” East and West during the Mongol Period, *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, LVII, 2012, pp.96-97.

「コラム 現存最古級の世界地図『混一疆理歴代国都之図』」、「地図で見る world モンゴルの世界征服」、週刊朝日百科『週刊新発見!日本の歴史 鎌倉 対モンゴル戦争は何を変えたか』、朝日出版社、2013、pp.15-17.

「53 古今東西の『知』の統合:ラシード=アッディーン『集史』」、「61 東西文化の邂逅:李志常『長春真人西遊記』」、「62 コロンブスをも魅了した東方の驚異:マルコ=ポーロ『世界の記述』」、「63 諧謔の旋律:関漢卿ほか“元曲”」、「64 チンギス・カン讃歌 モンゴル版『古事記』:不詳『元朝秘史』」、「65 中国史入門のベストセラー:曾先之『十八史略』」、池田嘉郎・村上衛・森本一夫編『名著で読む世界史120』、山川出版社、2015、印刷中

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮 紀子 (MIYA, Noriko)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号: 60335239